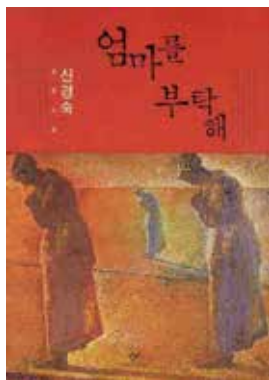


다양한 프로그램으로 청년의 책
구입을 지원하여 독서 친화력을 높이는
계기가 되고 있습니다.

さまざまな支援プログラムで若者たちの本購入をサポート、
読書親和力を高めるきっかけになっています。

世界の本棚
韓国編



text : 白源根
(本と社会研究所代表)



韓国の注目作品。右
上から順に『꽃을 보듯
너를 본다』、『잘될
수밖에 없는 너에게』、
『아몬드』、『엄마를
부탁해』、『불편한
편의점』、『82년생
김지영』



韓流スターは 韓国文学ヒットの火付け役

日本で小説『82年生まれ、キム・ジヨン』と『アーモンド』が数十万部ずつ売れ、注目を集めました。ドラマ、映画、K・POPなど大衆文化の韓流現象は20年前からありましたが、韓国文学作品が日本で話題になったのは異例のことでした。韓国と同様、男女平等が課題である日本の女性読者の共感を呼び、『82年生まれ、キム・ジヨン』が話題になったのです。そして、青少年小説『アーモンド』は、日本の本屋大賞の翻訳小説部門で第1位を受賞したのが、人気のきっかけになりました。

韓国文学の躍進には、韓流スターの力が大きく貢献しました。エッセイ集『私は私で生きることにした』は世界的なボーカルグループ BTS メンバーの推薦、エッセイ『危うく一生懸命生きるところだった』は東方神起のユノ・ユンホ推薦、『82年生まれ、キム・ジヨン』は、少女時代のスヨンと Red Velvet のアイリーンが推薦し、人気の動力を作りました。



国内の若者たちからも韓国文学は支持されている。

1. 20代の女性読者が中心のソウルの小さな書店「サンクスブックス」。
2. 東海岸の都市・東草市にある「文友堂書林」も若い客に人気。
3. ソウル国際ブックフェア（2022年6月）の一角、独立出版物コーナーを訪れた若者たち。

文学作品のグローバル進出に向け、 政府が後押し

韓国文学が世界各国で翻訳された理由は、国力の伸張とK・POPやドラマ、映画など文化コンテンツの成長、そして世界的な文学賞の受賞が役立ちました。しかし、文学作品だけでグローバル出版市場で言語の壁を越えるのは難しいことです。これを後押しするために、政府は多様な政策を展開しています。例えば、海外訪問図書館、出版輸出プラットフォームK・BOOK (<http://k-book.or.kr>)の運営、出版社の著作権輸出広報資料製作支援など。また文学分野に限ってみると、翻訳公募の支援から海外読者向けの読書感想文大会の開催まで、さまざまな支援策を実施しています。

このような中、韓国の若者たちの紙の本の読書率と読書量はスマートフォンが普及したこの10年間、下落傾向を見せています。その反面、電子書籍やオーディオブックの利用は年々増加し、小説やエッセイだけでなく、自己啓発や財テクなど、実用書の需要も増えています。



1



2



3

- 1・2. 「2022年青年本の年」のエンブレムとポスター。「本で充電しよう」というメッセージが込められている。
3. 世界的な話題作『イカゲーム』(Netflixのドラマ)を模した、城南市の「初発本ドリーム」のポスター。
4. 1人当たり10万ウォン限度で図書購入費の50%を支援する、全羅南道順天市の「青年夢探し図書支援事業」のポスター。

会員証を持っていれば 本購入の半額を支援

今年「青年本の年」でもありません。これは、2018年に施行されたプログラム「本の年」の若者向けバージョンで、良書の情報提供と本のプレゼントを通じて若者たちの読書活性化を狙っています。政府と韓国出版文化産業振興院の後援のもと、本の著者や出版社、書店、図書館などが連携してプログラムを実施しています。

一方、全国の自治体の中には、地域の若者に本をプレゼントするところもあります。京畿道城南市は「初出発本ドリーム」事業を展開。満19歳で、かつ公共の図書館で今年6冊以上の本を借りた若者を対象に、2万ウォン（およそ2千円）の商品券を提供。大型チェーン書店やオンライン書店を除く、街の書店でのみ利用することができます。全羅南道順天市では、図書館会員証を持っている満19〜39歳の若者に対して、本の購入の50%を支援する「青年夢探し図書支援」事業を展開しています。

また全羅南道では「青年文化福祉カード」を1人あたり年20万ウォン限度で支給。

このカードは塾や公演、体育施設の利用時などに使えるほか、本の購入にも活用できます。慶尚南道の「青年求職活動手当て支援事業」では、毎月50万ウォン、4ヶ月間最大2000万ウォンを支給。教育費や試験の受験料として、さらに本の購入時にも利用できます。

本の購入費を支援するこれらの事業の数々は、利用者たちからも非常に高い評価を得ています。今や若者にとって、紙の本よりもデジタルメディアやスマートフォンのほうがはるかに身近な存在。そんな彼らにあえて紙の本を推奨する取り組みは、若い世代の読書親和力を高める重要なきっかけになっているのです。

